

編集後記：禍を転じて福となせ

2001 年 1 月、本誌創刊号の「編集後記」に私はこう記している。「私たちの研究は、単に過去と現在を見つめるだけではなく、未来志向の創造的な探求でありたい・・・人類進化の行く手を思料し期待する、展望ある研究でありたい」と。さらに小論「世界の文化の調和と融合を求めて」の要約に、次のように書いた。

21 世紀は文明の衝突との予測（警告）がある。しかし地球上の全ての生物は一体であるという共生の意識が芽生えている。共存と人類進化の方向を見定めるとき、全ての民族の文化と伝統を尊重し、調和融合をはかる必要が痛感される。「経済に倫理を」「文化の調和と融合」を 21 世紀のモットーとしたい。

だが 9 月 11 日の米国における同時多発テロ事件は、こうした夢と期待を打ち砕いた。そしてその依って来る原因を究明するのではなく、単にこれを現象面で戦争ととらえての報復という対応は、新世紀を迎えて高まりつつあった共生の意識を、急速に衰えさせてしまった。

しかし我々は 21 世紀の世界を、人間性無視の戦争と科学と経済優先の時代に逆戻りさせてはならない。地球上の全ての人間が、思想信条の如何を問わず、調和して生きてゆける社会を希求すべきだ。悲惨な過去に学び、その英知を人類全体の生存に生かさなければならぬ。「禍を転じて福となす」（『戦国策』）決意を新たにしようではないか。

さて、本大学院は 2001 年 3 月、89 名の第一回修士課程修了者を出した。本号には各指導教官から推薦のあった修了生のヴァリエティに富む力作論文を多数収めることが出来た。また本号より編集委員の有力なメンバーとして、真邊一近（人間科学専攻・教授）を迎えた。紀要論文の電子化や、本号の編集は専ら氏の工夫と努力によるものである。

(2001. 12. 8)

編集委員 上田邦義

Editor's Note:

Turn a Disaster into a Blessing

I wrote in the Editor's Note of the First Issue:

“We hope our research will...also be imaginative, creative, and futuristic; wishing that it contribute to the rich development of human societies, in accordance with (or in harmony with) human evolution.”

The disaster on September 11th and the subsequent revenge suddenly changed our prospect for the 21st century. But we will not give up the idea of creating a harmonious society for all peoples on earth so that they can fulfill their lives regardless of any differences of ideas and beliefs. (December 8, 2001)

UEDA Kuniyoshi

編集[審査]委員

五十嵐雅郎
乾 一字
上田邦義
小松憲治
近藤大博
佐々木健
永岡健右
真邊一近
宮本 晃

Editorial Board

IGARASHI Masao
INUI Ichio
KOMATSU Kenji
KONDO Masahiro
MAMABE Kazuchika
MIYAMOTO Akira
NAGAOKA Takesuke
SASAKI Takeshi
UEDA Kuniyoshi